





ことふに戦ふに敵蒼然と生ずるものあり  
 其のしるは是又世に伝ある物とて其の  
 著りしるはは二世生の同は源はれに  
 ちりしるは二世の芽生を一粒の粒玉と  
 かりしるは其の粒とて其の同はれん  
 如法を及んてんてんは中にちりしる  
 冊を直んてんてんは其の同はれん  
 其の同はれんは其の同はれん

麦麩舎隨筆



○とて有て此世ふあゝる事能諧ありさばハナク麦羅  
 其象ふ能諧ありさばハ能諧の名目をあゝる者として  
 能諧の約とてあゝれて一物も弁明せしむる儒門の聖教  
 あまざる金言名号とてあゝるは是とて世人はさるは世に  
 開列しつゝあゝる辯教せしむる舎得とて其の則能諧也  
 教門小傳経の如き金紙金泥を用ひしるは是とて世人は  
 史記しつゝて説法を是能諧あり神道道学とて其の  
 既小國政を傳へるも其の教古今其の通はるる文字  
 本義のわが里をたて八通しつゝ其の今日ゆゑの日本河

漢字を中せて字安く讀易き中にして觸状も出る事あり  
志う體も此能潜を神代より自然のまはして久しく世小  
はく永く世用を賜うるものありて上

天子幸此御河上經下卑賤乃為の記を能潜ありぬは  
なりよ川ま時の流りあり世の雜音小いも近うは字  
うもめていもく有て今なきも今ありてむうくたもくも世を  
能潜なり體もふも

○代く乃歌介能潜あり名目を知りふうといふ能を  
能潜といふも我志ぬ人れ多かりに芭蕉の翁能潜は  
本義と見ゆ一世小ある能潜の句よまてこれ魂とて永く

世小殊さけしを

梅の花おれ毫少も似るるれあふ款もはけくそあは  
右菅家乃御詠あり一是能潜歌なり又後を羽院乃  
ぬれく小雷 是能潜の詞なり

○日本乃風雅を和歌也 唐土乃詩 天竺の伽陀小は  
かあはけたりたむるれはけりて是我志さるを夷狄小  
近うはる一も體とは和歌ハ始あふれ一は御河より  
かき八重垣をまもる一も月系よふを述る我志あり  
はくし小集て題詠奇合ありけり代くの撰集も  
あはれりれはく吾國の美事とあまなり多か美葉集乃

うちふと貴賤のふたあたくは山樵のふりもつて種々様々  
を世に事の幻ををばし和歌ははるるゝあともや申は  
より弄とむく乃つちくしさまくし品を撰むよつてつて  
此言禁の事うれをよこし今此幻のむき成まきつておのの  
幻とつとれをえくみゆし事成定名ておのくし流るを  
引はくとの泪をさくしも泪のぬるりにあんちありぬきれと和  
歌乃風体といはまきを申し其幻さばまき事うつりおる  
うれとれやうふあうたりされととれ和歌成作せん者ま  
國學系彙選集のしうくふつと学をねも風情を述する  
あつと士農工商乃四つは民のしうはあまき必ふ日本り

春れあうく偽歌のつこも言せんを毎あう程々をあまは  
ふつの中男馬の船歌れまうひをまの事りなくし  
時乃拾里より流り来る難曲暗弱の風ひもの乃口をさ  
て己う風流いさくはあしちあし和歌成よも物るこもれ  
ま産業ようくれすし和歌とて和歌ハ 堂上よりえんやあある  
高の高富農耕職隠居のこはふまよれり是れ和歌の幻の  
定すりて歌をれし用あれとかなる層し若し和歌成歌を  
日本に備へし風情をりつとふせんとい信後平信を用ひ  
一文不違和歌成みしつとまきのふさむ層し

○恐あふくをれし

天子 將軍家公家 諸侯もてはさげふ和歌あてはさる  
似合しういされと俳諧の御心得もありとるより其外  
高貴富貴神職隱居遊民のいへぬあるやまは傳歌ふを  
よまをゆれたりとて和歌とあましくいふ限りも俳諧の連歌を  
似合しきとて和歌と國學歌學あてて遊をんハ御階上  
あやあましくいひる其余四民の風雅ハ俳諧ハ志ありと

○俳諧のしを周雅を昔とされも文藝ハ詩法其法を用  
ひて酒食ハ重菜馳走とてぬきて傳ふまををりてす  
とて遺書もいひる心得をゆ

○荅心門ハ七部集と要文とすれと猿蓑山灰依深門あてり

古の海へて余まき日冬の日あてハ其世の人ハ海へてま門ハ  
しあ終ふ条件の大途ハ守らん階梯と知る

○故事と出ハ古言と用ひ漢字とをいひ人知ぬまをを  
と傳へり荅心門の深意ハ遠くわたりぬ教乃大志ハさつらふ  
あま世上乃季寧部類ハあまとも正風を信せん者ハ昔  
あま今あまより又かりにわたりける季寧所をさるへりハ  
くくハある事と言出テ洒落の域をうへりてまをを  
そをるまをわら

○翁迂化乃後ハ去來文州とてはるめ素堂大志何まこと  
ねよまハ其角風雪我り意地をまて荅心門もこと利

多志風伊勢風さへんあまをなほ流く五毛子あまをなほ風  
 不成きうらまの一旦蕉門をなれと原然安永の頃より諸哲  
 競ひ起りて正風はかへん寸沙粒と蕉翁の起りの時り  
 日く人の彩色を結構あてハ寄るも付ねをみるの日にこの日  
 かくより導きなすく正風を冠く天明寛政文化文  
 政を冠てあま猿蓑岩依とく作し来るるあま安永小  
 を新日をうけとく生つる乃自小あまを文化猿蓑を撰  
 きたくつくさく猿蓑ふくくこの天保よ岩依を編くく  
 くと岩依小日くく作あまをく此時人日くかぬを安  
 永と安永文化文化天保と天保の風調たり詩小唐宋

明乃風調あま日くくされと岩依とくく一色うくは徳ハ天保  
 風体あまあま一を平日久くく四海あまやうくく多人の石子  
 く質素篤寧の風を隔をれと取らあまを岩依猿蓑  
 集の意味にくく正風乃甲あまを正蕉翁新極意小くあ  
 まをあま

○天保乃俳諧はま連多うらまの故事古歌のお木はりあまを  
 まあまを穀伐を苗あまをくくをきりくあま毎乃説を用ひま  
 枕詞のぬきく成ま程漢傳の學たをく作くく和あま  
 撰集く其代くくのまはまあまあまくく作あまの志ま  
 かくあま

○去婦ハ乃法則之去をく知れたるは出まはれおれ  
其席に於て宗道示はるるを合とて言ふたれを他の他  
語を足成るも字去あはれおむるなり

○他語より意味あるを以てて他語の幾多一乃上もあれ  
と連句に於ては血脈を傳へたるを去るも前小抄載一の  
乃乃執着をぬく

梅系はそし短しむりや有無乃をりてり  
是た在一毫の去婦の字去あはれおれ  
者かあは眼かんも去婦をこそとてん乃去婦と去るま  
翁生涯方切は炭俵集のうらおれは是れ是れに

風細くおはる馬は啼く後

と之れ付句あはれ前にヤサの下より啼かしてといふはあ  
次小堀のころは秋風あはれ一乃小ニタ所傳りハあはれも句の  
意格別小かゝるはれも其後小選集も由はれ一乃あはれ  
千載の愚言と云く是れ是れ是れ

○世より季もとてりといふ事成婦ふ者あはれははれはより  
くむあはれもくもかゝるは古集とてはるる一敷多あり定例  
月系は去るもあはれ素秋素去をせぬるなりはれは月  
た乃云々月小初秋案且と付はれは初秋案且の付句はるる  
はれは有るるは古集示初秋案且はれは出るるはを



家をもぬれかり

○ 迹白堂リ小車 他門小く也 迹よりいふ有んや 毒云く  
○ 人倫三白 けくうとくうーかひとくふ若ありう川をー  
作き毎うく後とめし 吉集小一ト 此ル足えく 徳と徳授  
小と家へか守吉人の妙至あり

○ 月小良名花 花嫁も 輕お成出ー 言う去婦の在  
あつあふも皆 他門小ありふり出て 蕉門乃 能借小う月で  
あー 月を天象の白出は 休とれ引上て 付布ー 一まう  
たふまをくもくうーかー 花を坐定て あれも 出あくより  
公うけて 極まむを 出ま毎うー 以又坐あく 出はまをく

歌仙式うく 七白 月月出て あり秋 季はくくもの ちまて  
叶本お出さう 秋はあり 八白 月葉たをくうー 守本ハ  
出まをくー 原九白 月を叶 小くも 花にのりふ 出まをくー 守  
よれぬく 出るあをく 十白 月本花を 引上て 付布まあり  
古くま 白雲の 雲葉所を 用ひて 葉よ 葉あふくく くら  
事一かー きてに

かまゆらく 人の 糸肩小く 川紙衣か 扇

あや せうく ちんちん ちんちん 曾云

又

夕鳥や 夢小 坊を みる 友 産 女 為 有

西日茂ぬせく之敷乃下莉

扇

又

十之夜曉星紅く女之肌

扇

小袖の糊乃十之夜紅着綿

扇

又

紫根をよみ有くくはの雪

扇

紅くく曉火然くく松林紫

強處

は和山ある春〜〜き川とさきき香葉前をわけぬる  
〜ふ〜香葉前〜〜く香葉をたけ

花よ香葉前〜〜ぬ紫〜〜柳

若壽  
蒼虬

ひは〜〜〜たすう松蔭

は狼まの〜〜里あ〜〜を孫〜〜たま〜〜を又毫の〜〜を  
な〜〜を雜〜〜を去季形〜〜守と雜〜〜〜者あり是  
理屈の備あ〜〜ゆ浩不難煉より出るものくす川眼を  
〜〜き〜〜其系情を紫を〜〜〜退屈志〜ぬ翁の体  
孫よ〜〜と能た〜〜さぬルありぬる〜松乃み〜〜を  
あり〜今〜〜の毫さ〜〜り〜〜と古〜〜あ〜〜んえ松根は傍  
て腰を磨れ〜〜朗詠〜〜ある今〜〜く〜〜情が〜〜趣を乃  
さ〜〜と志〜〜もま〜〜香葉前〜〜り〜〜形〜〜〜〜〜され〜〜と〜松葉翁も  
よ〜〜と〜蒼虬翁〜〜ら〜〜ぬ〜〜川〜〜多〜〜き〜〜す〜〜ら〜〜時乃名退〜〜れハ

よと氏に志しなるを

○花は風付重うくはといふ説あるは是又他はあるなり程高の  
能信はあまのくえとありて中流にけやたんと奉て修す

猪猪や毒下には能を花乃勇 泉川

雪はれふを海を中くまき風 路通

又

焚きくそ葉をより庭新気 古芳

ちうきけりくすま乃風 節 翁

又ふ然むきふたるあり

三々の様ふ屋へ花けり 尚古

ハツりりよき 幸は吹降 翁

又

幾口の花是の連小清きい 性然

日とせり 其 幸は風 野剛

但し 賀屋 までと遠くあるを

○安永の改より葦門中興へ感ふあるあり時乃宗道達  
中合へ堂上より言へ能信の御舎を備へ自分御殿の  
宗道格不任しられねむ式をかきとせられく法式を格め  
執事作法し調ひをせより以来立札進答案且  
亦り列序厳重ありたり是能信の感事よて能士乃

面を起し魚丸時にして祖翁の存徳を思ふにあんさきと  
翁を世にさす根の式化法ある事を字を願上りて乃  
序會子出れりといふもあらず一全く翁の存意を思ふ  
存うは是より倣法を學べて己の感を志し一神を  
中やハハハ生をむすげりやうといふもあらず況んや  
ある者形害未始人のてく異体より人をも吐辭能  
を愛ふ意味をあはれしき虚名を捨ててははの小學上り取入  
自分花の中宗通の号を免れ芭蕉翁小のち明神  
乃神号哉中下して世上は流布をかまひまらふ芭蕉翁人  
一世子明眼を并れ風雅のをも感さうといふ四海小弘通して會

野陀の境界をあやうく末代乃愚民を向上の一路よりあき  
あき高徳の處の隠さんといふも何をやた己の利益  
かたりて祖翁のち意成志は事あるを人をも迷倒あき  
しむらひる事なかり

○倣法を乞術とて乞術運のをさうとすあれハ人情ハ人情を  
うらむ○内体ハ内体哉かき○乞のさうしと變化しる哉かき  
則古作をさう乞術ハ人情乃亦誠小系糸を乞け景毫の越  
小人情を乞けゆを乞術ハ變化を乞術中あれハ彼等柱  
にさうせはともいふ死物なる乞術ハ不撻煉して思ハ功の者  
かあらは迹ををまほし一異格ある事哉吐けと越と切ん

私出軍成をい川まで越さきくものくせきいあけ  
まじかり甚いき中う能ぬさひまかあは依信寺僧山い  
とれあ

○三鳥二本とけぬ秘傳口決ふとやあて初を成おらうい人者  
あり西風甚つるとまうて尋たれらうとあふ

○名を実能宿とやんも能名とる撰むるれあれとす川ハ  
何うたもつりか守急あんとくぬよまをくかきを  
詮とまへし書はあは里さいとて書はあは信ふあ  
た実体あふ成ぬさきやうにらひくわしむはうくか  
者あ理早真まの垢うとあぬまのま支限あ

○初ふと花夕花に里抄士口あは能名まあるものあり  
生るの序揚弓場淨極極の位あり俗く一なう  
初ふあれを能たう功者にあり舎子堂号やけるふを  
よれ事あうま五文字七文字の草号園号ありう

○能名の何れ何れあは自書く者あり能人ういお史  
とに潜号捕号まをあれと能祖をいおとあはえまれ  
そ位あて遠海あはし作一還曆古稀の齡を過お  
能名の下に能とちもまうた一とて何れと  
うはあはあ史とけけう史まを名の高と下子の人  
さねを流りおれはあうはある庵

又龍鳳麟鳳 勝あはれをまて付さう侍者たるは 悟の  
はのれををるるが成士実なるは 邪路の溢るるをまて  
あやまひて付さう侍者たるは 悟の  
まて者 尺八能師 あはれなるは 悟の

○作例おる侍者たるは 蕉翁乃 能徳の 多増あるは 迷ひの  
程かり 唯てお小疎唐の 道行の 日成言さす 和漢の 学  
者成 追ぬきて 風雅は 是なるは 悟の

○一公不乱し 殊唐の 功をつむらふ 自然と 理とあはれ  
不たるものあり 向上乃 一路なるは 祖翁の 金言たるは 悟の  
○世俗の 悟の 時をいさかた 入るは 悟の 悟の 悟の

中なるは 成雅と 是 跡なるは 昔物なるは 悟の 悟の  
雅とて 唐物の 存自唐を 雅物なるは 悟の 悟の 是ハ  
人我乃 我とて 真雅なるは 雅と 是ハ 悟の 悟の  
よめるは 是とて 天地茶梅の 徳をいさかた 是 跡なるは 悟の 悟の  
悟の 雅あり 公家と 公家の 是ハ 侍者 侍乃 是ハ 悟の 悟の  
姓も 所く 百姓の 是ハ 悟の 悟の 雅かり 日本 の 者も 日本 の  
物を 是ハ 悟の 悟の 雅と 是ハ 悟の 悟の 俗と 是ハ 悟の 悟の  
てり 是ハ 悟の 悟の 是ハ 悟の 悟の 是ハ 悟の 悟の  
は 悟の 悟の 是ハ 悟の 悟の 是ハ 悟の 悟の  
ら 悟の 悟の 是ハ 悟の 悟の 是ハ 悟の 悟の

事やきくやのひくを俗もいやうのくはきくも俗も俗中乃  
雅をとりひて採棠を山吹とち神樂殿を神楽堂と  
て故毎をたゞしきと雅言とくちつるものを省略し俗  
後平俗を司ひ給ひく志るも西行杜子美も超越せる言  
吟を吐給ふた理

○氣韻風韻を自無のそはまそ其人ししの拙き人ある相  
あつたかあしきもあつたかあしき此氣韻風韻のそ  
さばと徳言たりされと西風も梅庵とまをいひつるあつた  
韻風韻も俗ひ其るなり其氣韻風韻をわくそ成る  
又いひつたるものそ尋ひられはかりあるそはつたる

とれあしつたるものとるれとき門とあつたりまあは思はく  
書画茶道具あり氣韻のあるあつたりあつたりあつたり  
か歌を定むるにんは思ふるなり行要たりと

○さば楼へのけりるにせはく建たけたるはまそ庭中う乃  
とみり形きれしや勝も乃方の家行上よあまそ鉢植の小  
松成ありぬおけまきしと其ま鉢好くて造るもの小や幹  
をゆるせ枝を清ひあるハ藤の種をかまきうめく一何るま仁  
まはとぬしとあつたりとくさあし曲所をそしつて西の  
くたうしてあつたり居しやうとあつたりの出きうして巻らう  
すに一つは鉢をわひしと此鉢を見給くやたか枝葉すま不





師と負ふ有る信然其よりいひなき一何のありき幸すもたは  
おほえす他乃汝のよれりも師の年をわしむむとせえ  
いりふれととて他信然師を信し如く我師をたけしと  
乃とて得あやなり者多し一たて我師をいふとて  
余師のいふかひきて余門はいふ守まはるる我さるる  
又師のいふかひを違ふ人きひしり師門を守  
りて志すも一ツ師門をかへて違ふを学んて大家をたて  
あまのりて余の門へ入る我師を信し未練の小人かりと  
いふて他門へ入る弟子を不義に氣にまありはぬをよし  
希ふ也一他門とて其門乃か他門のいふあはる

○今何のしる何のしる事とて能信する名家の二世三世とお  
信しし権を張るるの事なり一其の初めは意をいふとて  
能くしと是は道の信し人成るるありしをわしむるふとて  
いふしと名実を号せ継ぐる遺傳のありしなりある  
はししとてやとて其の法なり一其の号ありしとて一世限り  
小練のありし先師のありしむるきなり一未練の弟子は  
乃名実を号するのありしとていふしとて其の法なり  
いふしとてなりて著ししなりは是なりありしなり  
○さるるに云ふに能信者多くて能信小なりとていふしとて  
是れいふしとて考ふるに今乃世未練不継練の下なる能信

師とあれを用ひては余度予の心とすべしと云ふ事あり余業を  
く俳諧の拙者より云釈をむとけりみたりと云ふ事ありとほ  
こせり又達人と云ふは余業をわくえと云ふ者も志あり  
と云ふは下等に着たあやうく下等能く人ふむ事あり  
亦かり富家の者を只と云ふはと云ふ事ありと云ふ事あり  
と云ふ事ありと云ふ事不能成にくと云ふ事ありと云ふ事あり  
乃考もたせりとのて休庵と披瀝とと云ふ事ありと云ふ事あり  
又て拙者の者を余業と云ふは彼の仲間より云ふ事ありと云ふ  
俳諧の拙者も此市中中といふ稀なり歎かして云ふ事あり  
あり俳諧蕉翁無学之有を其後と云ふ事あり田舎人よ

我國の風雅成去々々あやうく云ふ事ありと云ふ事あり  
かゝるやと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
たかく功拙を言はれず人達人を何れも免衆を云ふ事ありと云ふ事あり  
風雅弘通を云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

○ある書に曰 旅僧体の老田舎に於て一宿をとると云ふ事あり  
その事僧ハ何人かおとやと問ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
たかくと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
亦歩俳諧師乃高と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
稀なる物をかきあ人をたかると云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

能此者小浪之の以琴棋書画をたしめ清道中もあるあ  
かり後之れ技藝乃者より能此を始とすむる法よく  
編まるとは是れ神と云はれむるなり

○ 叔と社世より御あを若若の初めをさるる風種風俗  
をまるとは月名の名境と云ふ故人の事蹟をさるる  
名のはりたりた豪家民をたつ子に甲斐封問小類  
をたす乃に詮まると衣物を借り奥を小飽き信酒を  
けり中より生涯をまるとはあてたるは陳前設席の  
者よりなり其中に稀なる縁と連ふ小寄り者ありとむ  
うと我情我執よりむる人の上より人を知る一名をまて

名人英哲の准せしれんる成程の啓啓小あり者多し終は  
其寄り小座より各も永くをまるとして已りはれとむる  
又を世を恨とあるは是れ鄰をまるとは胸痛しと世を辞を  
はたるとはむらむらと云ふ又を世をまるとはむらむらと  
云ふ

○ 杯茗翁の能此作と成るは因縁を余得たと云ふなり  
と標堂分家乃君より仕へま君早世よりつうくの殉死に似ひ  
道世一佛門は入禅味を味ひ是を種とてはる小能此正  
乃其門を究めるとは自ら言ふを生涯をまるとは食路  
院の隆り小はれ一徳素と云ふ精を成りつうの徳書  
に奉て世より一を能此作此題意を継ぐありとす一

風雅の原を以て風俗の誠を以てて而して雅俗を擇ぶ  
 夫れ亦其の爲とて守りて業を以て術を以て作すに擬煉して  
 終よ其の面目を以て爲れあり先之己の業を以て雅俗  
 成るるを以て因縁なくしてかかると志す處にたてて自家自  
 家子其害ありとも守りて忠孝を以て一旦再興の志を以て  
 爲れたりゆり障り有て事ありは是の時因縁ときたも適世  
 して雅俗少く成るとも守りて爲れりゆり雅俗共みたる者之大  
 うに致す處人ありて西法を以て守りて西法を以て守りて但し雅俗  
 昨の子を以て業を以て継いそ因縁之替りて雅俗共みたる者之大  
 妻慰金隨筆畢

夫れ亦其の爲とて守りて業を以て術を以て作すに擬煉して

追 加

梅室隨筆

○秋人より雅俗を以て守りて業を以て術を以て作すに擬煉して  
 を以て守りて業を以て術を以て作すに擬煉して  
 ありて業を以て術を以て作すに擬煉して  
 ありて業を以て術を以て作すに擬煉して

秋人より雅俗を以て守りて業を以て術を以て作すに擬煉して  
 ありて業を以て術を以て作すに擬煉して

巻五にありてあるはこれなり

吾もこれにありてあるはこれなり

此歌の全体は雅なりとわがくに用ひるはこれなり  
あるは雅なりとわがくに用ひるはこれなり  
雅なりとわがくに用ひるはこれなり  
雅なりとわがくに用ひるはこれなり  
雅なりとわがくに用ひるはこれなり  
雅なりとわがくに用ひるはこれなり  
雅なりとわがくに用ひるはこれなり  
雅なりとわがくに用ひるはこれなり  
雅なりとわがくに用ひるはこれなり  
雅なりとわがくに用ひるはこれなり

世にわがくにありてあるはこれなり  
雅なりとわがくに用ひるはこれなり

○よくよき法をいふはこれなり

あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり

○あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり  
あるはこれなりとわがくに用ひるはこれなり

信止いし店の控を以て好キのそふくとも心来おや  
その所より系りんと申ぬ事う曰店の控とあれは是れ  
及も守る事あり



此程きく

田原侯

若狭の紹介

又季彦

此程きく

たすく〜とある天下随一乃大任を蒙りありて是れ  
熟せんともよくとくふ一店の支配人小たりて能  
る〜とある地盤偏のまじひたり能得を基お慕生花  
乃頼小ありて人懐世態よく〜とある私親よるも  
つかり〜とある者我退き〜とある丁稚を志す候も  
風流と

とてせもあき〜とある立廻る角〜古語子曰車は  
用由とありて膏を車にのみ造り〜とある物小を  
軸にぬれ〜とあるキコルゆり〜とあるやう小  
なる〜とあるはれ〜とあるは〜とある車小油の  
○連歌を一坐百語と定はし〜とある能得る延宝  
天和の改とて

一倉百員あり〜とあるか〜とある終日或ハ終  
ね仕家業は妨り〜とある角ありて志す〜と  
あり〜とあると大亭に能得る此の式を志す〜と  
あり〜とあると此の〜とある小敷日か〜と  
あり〜とある一席は一坐を志す〜とあり〜と  
あり

とてやいぬとある城を去る處一松をありと有りより略て  
ほ松を運くとも難鳴すてには海尾一松をけたりさる  
とれをそけやうに五つ七つも束さる際なり一松束の時と  
うはききき席上の妨なりと記わると一うはき出さる一うの  
ぬをさき時乃様編よする處一とけ世まゆとゆきと云席  
地よとて附切成儀る處一とけ世まゆとゆきと云席  
にゆく候時の統る古ある成却て席上の儀儀を席儀儀と  
く名付けてゆればこれを徳言タコトを付ちくと早く終る成所儀と  
き候あり思ふよ古代の人を初めより席小はくありとて  
束するよに訓すかの志長志長石六牛の教つてゆれば達者

にあつたの必定なりと初初公ハ昔の縁分乃といふあり  
志るそそあつた人といふもなかつたころに風成とて  
るめつてめつたやたつてにう敷をばらして付もはらぬもわきま  
あつたやうにといふと初初月をばらして儀味を志ると  
いふう生涯あり憐むる一法儀とも一旦艱苦をばら  
て蓋契と寢る事ある處なり

附分むふ時をいふより五つ七つも束さる公先なり  
あつたあつた初初あつて何れも宣的なり只一本乃矢と  
射あつた公よたりと五つ七つをばらして言ふは初初

梅室陸軍

附録

蒼君乳翁遺書

○ 奥の細道に藤井氏、あつたれ、ふ打言、乃々、屋より持来れ、う、庫、物、の、金、を、  
 派、画、を、て、枕、邊、の、中、に、婦、人、を、う、り、む、古、代、の、雅、お、え、と、い、へ、と、此、画、を、く、  
 狩、も、め、て、う、む、む、の、價、成、布、一、い、の、あ、り、と、指、差、一、い、ふ、と、法、便、あり、  
 此、を、と、画、を、く、と、い、ふ、と、か、つ、た、を、お、き、方、を、さ、う、と、い、ふ、と、う、り、た、は、遠、  
 へ、か、つ、た、れ、と、い、ふ、と、お、え、に、と、画、の、あ、り、と、い、ふ、と、え、事、た、れ、と、お、え、し、  
 と、い、ふ、と、ち、お、え、お、き、お、き、と、い、ふ、と、此、理、能、信、も、い、ふ、お、き、と、い、ふ、と、  
 ○ 何方に集申すや

行はせしむる乃所ありと云ふ

と云ふ付あり門人某、たふ、面、ふ、と、云、々、ふ、申、又、それ、を、  
 何、の、面、お、え、と、や、汝、の、面、お、き、と、い、ふ、と、曲、言、あり、一、味、の、面、お、き、  
 何、の、面、お、き、と、い、ふ、と、辨、あり、或、面、お、き、と、い、ふ、と、又、證、あり、と、い、ふ、と、  
 一、と、い、ふ、と、是、を、さ、ふ、者、お、え、儀、は、力、た、る、と、

○ 出来ぬ、と、い、ふ、と、の、あ、り、是、は、廿、ぬ、あり、出来ぬ、と、い、ふ、と、一、此、  
 理、何、の、ゆ、り、あり、と、

○ 美、も、お、供、ま、ら、お、給、より、五、六、人、お、ま、て、能、信、を、立、つ、と、

山、と、り、に、岸、へ、暁、出、を、撰、り、れ

此、眼、十、二、三、の、事、一、お、い、ふ、と、或、は、又、廿、の、半、お、き、と、い、ふ、と、  
 死、を、お、い、ふ、と、二、三、十、の、事、一、お、い、ふ、と、は、を、や、り、と、い、ふ、と、一、と、



返すはるるを申す刻斗にならて各招氣をそと原はく大  
はのを中其来りては下成字と新より新録中をえをへ  
かたし中其内はあふし一素一二を挙て昨小備せんも別ち  
多々中よりあふる成授也一豊のまへ持出と新より  
数々の振いしに付るよりと某う又出す所二二あり是を  
こらしと志まふやと豊はししとんを皆わらし一四存の儀を  
付けぬらう山盛といふま此のれ皆たり是を付るふ  
山より新録あふらしと備者困りて去る

○あふく付る敷度素しとをそとしくと豊こらてと後まふく  
らしとて曰此ふいふもむらう一博のまへに付る

見せ給くと豊曰これとを急ま付るを汝ら素しはる程  
素したるを付る一と誦なるうか

○豊付る幾度もはるはるは其付るゆとさうりたりといふ  
まきりに同しといふ皆おと素まへ一自然とを物小あふしと  
神の者十に言ふより多し一物れも後發明のそと  
けりゆまの自をとおを付る解と其はを抄ゆともみの能  
借小其通り新録ふれを言たりといふあふし

○両吟よ付るをそとけり大ふし一まあらし此あとしらう一かん  
とあし一素ををへし

作者はふやれて曰と新よりいふしと皆おれとる昨録小



前々集る既に意解二方目小なりと教白出せしものさうに取  
中されき既に三五の積り、終りて去んとする時、奥一白出さ  
し、より連宿たるは、これ居て是能を論せし、白は定め、いれ小  
出より各々白出たり、一白、奥小似合さる、然は、法ふやきて  
明日系、唐のせり、是、我、論せん、も、我、を、う、て、分、を、ま、を、ね、お、を、お  
各、亦、連、座、小、付、て、ん、は、小、子、其、白、は、強、紙、し、て、余、の、白、よ、か、い  
是、り、む、を、お、の、白、り、す、は、る、る、十、倍、せ、り、性、の、子、お、より、来、り  
て、某、一、々、む、と、日、坊、に、官、ふ、日、坊、日、と、お、来、る、は、法、も、来、る、を、昨  
此、我、者、退、出、せ、れ、る、後、さ、う、に、賦、子、付、る、と、て、る、某、某、某、  
る、凡、一、時、斗、り、を、と、お、執、筆、を、呼、て、お、の、め、し、と

淋り一白と心跡畧うと我れ寸

○事、に、及、ぶ、成、業、一、ら、は、く、ま、と、お、小、書、留、ま、う、る、事、お、  
教、十、白、案、一、お、な、て、門、人、に、二、三、白、つ、出、せ、る、評、を、さ、せ、る、評、  
二、三、く、小、及、び、て、お、入、る、は、法、ある、に、附、一、座、に、二、三、白、つ、か、う、と、い、と  
は、く、に、控、る、白、お、さ、う、い、り、門、外、に、お、座、す、一、多、年、お、る、小  
持、白、教、百、白、小、乃、ふ、お、利

○奥、八、十、歳、に、及、ぶ、中、お、さ、く、心、あ、く、く、能、浩、の、名、後、一、か、と、ま、  
お、身、ぬ、や、う、小、な、れ、り、其、後、の、能、浩、ま、大、う、の、執、筆、お、し、お、掛、き  
た、う、ま、て、は、く、あ、れ、お、る、あ、く、一、奥、う、能、浩、と、お、入、る、の、後、  
お、心、揮、ひ、短、冊、の、志、を、お、し、お、認、へ、筆、を、お、て、毛、筆、の、上、に、お、し、

ふりあはる 迂化 昔年 春の 只ら しく 致さ 凡 萬 八 十  
五 劫 不 去 といふ 括り 那 ごと 中 括り 凡 十 小 劫 あり 凡 十 劫 あり  
中 十 劫 あり 凡 十 劫 あり

夕 暮 也 たり 一 小 劫 あり 凡 十 劫 あり

二 敷 山 といふ 小 劫 あり 凡 十 劫 あり

三 以 たり 来 たり 神 不 付 たり 凡 十 劫 あり

四 あり 凡 十 劫 あり 凡 十 劫 あり

那 ごと 中 括り 凡 十 劫 あり 凡 十 劫 あり 中 凡 十 劫 あり

共 君 軋 翁 送 幸 終

弘化二乙巳 歳二月吉祥日

京都 山城屋佐兵衛

全 林 芳兵衛

大阪 河内屋新助

全 河内屋茂兵衛

若山 帶 屋伊兵衛

弘化二乙巳

書林

